2010年2月刊行

近世在方集住大工の研究

きんせいざいかたしゅうじゅうだいくけんきゅう

高橋 恒夫（東北工業大学教授）著

近世における日本各地の主要な在方集住大工（地方在住の大工集団）について、全国的な長期間にわたる地道な現地調査と資料収集の結果の基盤的データと体系的な研究。一九件に及ぶ大工集団の発生の背景や要因、その実態、大工の活動や組織、技術などの形態について、網羅的かつ体系的な考察を試み、従来の建築生産史研究における大工研究の隙間を埋める画期的な研究成果。

A4判上製函入　本文六四四頁（カラー六四頁）

定価五〇，四〇〇円（本体四八，〇〇〇円＋税）

ISBN978-4-8055-0617-2 C3052

目次

まえがき
序　論
第一編　近世在方集住大工とその発生形態
第一章　各地の在方集住大工の概要
参考資料　航空写真
第二章　在方集住大工の発生形態
第二編　近世在方集住大工の大工人数
第三章　諸職人の構成からみた気仙大工とその人数
第四章　在方集住大工の大工人数と大工集住率
第三編　気仙大工とその活動
第五章　陸前高田地方の民家普請
参考資料　気仙大工と民家持仏堂
第六章　寺社普請
参考資料　大工の秘伝書
第七章　五郎吉と花輪喜久蔵
第八章　大肝入・吉田家住宅と大工棟梁・七五郎
参考資料　仙台藩領気仙郡今泉集落絵図とその町場住居
参考資料　南部藩鬼柳と伊達藩相去の藩境枡形とその集落の復元
第九章　民家普請の出稼ぎと大工系統
参考資料　宮城県北と岩手県南の繁柱板倉
第一〇章　気仙大工と学校建築
参考資料　気仙郡地方における木造小学校建築の沿革
第四編　出羽・越後・甲斐・周防の在方集住大工とその活動
第一一章　出羽の在方集住大工とその活動
参考資料　最上三十三観音堂とその普請に関係した職人
参考資料　出羽の寺社建築にみられる力士像と鳳凰頭部の木鼻
第一二章　越後の出雲崎大工とその活動
参考資料　越後の出稼ぎ大工
第一三章　甲斐の下山大工とその活動
第一四章　周防の大島大工とその活動
第五編　近世在方集住大工を取り巻く環境
第一五章　材木の伐り出し
第一六章　仙台藩領の御郡棟梁と在方大工の統率
参考資料　仙台藩領磐井郡東山北方の諸職人と諸職人棟梁
参考資料　東北の在方大工とその活動
第一七章　最上川水運の大石田河岸の集落とその諸職人
第六編　近世在方集住大工の形態とその位置づけ
第一八章　在方集住大工の形態
第一九章　近世建築社会での位置づけと中世とのつながり
参考資料　東北の中世建築工匠とその史料
第二〇章　近世在方集住大工からみた飛騨匠
結　論
あとがき

著者略歴

高橋恒夫（たかはし・つねお）

一九四八年宮城県生まれ。一九七一年東北工業大学工学部建築学科卒業。一九九二年博士（工学）。現在、東北工業大学工学部建築学科教授。

主な著書に『日本民家語彙集解』（共著・日外アソシエーツ・一九八五年）、『大工彫刻／社寺建築のフォークロア』（共著・ＩＮＡＸ・一九八六年）、『江戸期および明治期の在郷大工集団に関する基礎的研究　気仙大工を中心に』（学位論文・一九九一年）、『気仙大工／東北の大工集団』（単著・ＩＮＡＸ・一九九二年）、『最上川水運の大石田河岸の集落と職人』（単著・山形県大石田町・一九九五年）、『唐桑・海と森の大工』（共著・ＩＮＡＸ・二〇〇四年）、『日本の町並みⅢ　関東・甲信越・東北・北海道』（共著・平凡社・二〇〇四年）、『日本の家3　北海道・東北・関東』（共著・講談社・二〇〇四年）など。

推　薦　文

内田祥哉（東京大学名誉教授）

これまで大工組織研究の主流は、家柄の知られた棟梁が主役だった。一方、日本には大工と呼ばれる職人があまたいて、庶民のための家造りを支えている。本書は、著者が永年調査してきた気仙大工の研究を発展し、日本全国の在方に集住する大工の実態を明らかにしたものである。

「在方」と明記するのは、社寺、幕藩などに属する「町方」の大工と区別するためである。また「集住」は、既に永井規男氏の使う表現だが、辞書にはない新語という。戦後に出来たアパートと、戦前からあった長屋を包括するのに造られ、団地まで拡大された表現と思われる。いずれにせよ、ここでの研究対象は、ある地域に集中的に居住している、組織的つながりの薄い大工達である。分かり易くいえば、一匹狼の大工が、ある地域に密住する現象である。

町方大工のように地域に仕事があるわけでなく、出稼ぎの一匹狼が、なぜ集住するのか。その疑問が著者の研究の推進力でもあろう。調査は三陸、北陸、近畿、瀬戸内に及んでいるが、その形態は多様である。発生については、木挽きに始まる説、農地狭隘説、船大工に始まる説、中継地集落説、そして人為的集住説、大工村説、大工移住説、など、七つの仮説をあげているが、その理由は著者が研究を深め、調査範囲を拡大するに連れ、深まったようでもある。

この様々な実態に対し、著者が共通の視点で注目したのが、長期寿命の建物にとって欠かせない維持管理である。そこを手厚くして、仕事をつないでいるのが集住大工達であるという。五箇山、白川村のように普段大工のいない地域が、集住大工で支えられている。それを著者は、富山の薬売りのようだと例える。

勿論、各地の災害復旧にも活躍する。大工事を応援することで、地域の大工より高い技術を持つようになり、洋風建築も早い時期に手がけているという。

明治以来、欧米の建築技術吸収に熱中していた日本では、伝統的大工技術が認知されず、特に戦後は無視されてきた。しかし現代建築の鉄筋コンクリート造も、大工が造る仮枠なしでは始まらない。

近世在方集住大工は、日本の大工技術を支えた陰の力である。漸く始まったこの分野の研究に、弾みがつくことを期待したい。

永井規男（関西大学名誉教授）

在方集住大工の研究の難しさは、まず資料収集から始まる。ほとんどの場合、当の集住大工が住むか、またその仕事先と推測される漠とした地域において、労ばかりで実のすくない手探りでの資料集めをすることになるのである。著者はこのような労の多い作業を全国的に広げて、交通の便宜が乏しい各地での調査を精力的に行っている。それだけでも嘆賞に値するのだが、その採訪は常に複眼的な視野をもってなされていて、そのことが成果に高い水準をもたらしている。また大工研究である以上、その作品に触れざるをえないのだが、そこでは筆者が長く従事されてきた、東北を中心とする社寺や民家の建築調査の積み重ねが充分に活かされていて、それも本書の魅力のひとつになっている。在方集住大工は過去の存在になり、関係資料もまさに湮滅直前の状態にある。こうしたときに全国的な規模での調査資料を提示している本書は、豊富な図版とともに優れた資料集ともいえよう。

本書でとりあげる在方集住大工一覧

本書における在方集住大工とは「在方に大工が集中的に居住し、彼らの主な活動形態が出稼ぎとなる大工を在方集住大工とする」と文字通りに定義される。

「紙本著色　大石田河岸絵図」（部分）江戸後期・大石田町東町地区所蔵

本書の特色

- 全国各地19事例の在方集住大工を体系的に研究、一書にまとめた、日本建築生産史研究における空白を埋める基礎的文献。
- 現存作例や模式図など750点を超える豊富な図版により、在方集住大工の活動の視覚的な理解を助ける。
- 長きにわたるフィールドワークで、民家に残る棟札や明治期を知る古老からの聞き取りをも反映させることで、貴重な「生の声」の情報を掲載。

本書をお薦めする方々

近世史学・建築史学の研究者、教員、学生の方々及び研究室、工業高校・大学・公共図書館。博物館・郷土資料館学芸員及び各都道府県、市町村教育委員会文化課職員。建築会社・建築設計事務所・工務店

第一編　近世在方集住大工とその発生形態

住あり、……次いで加能方面より名工が来て大工をしたのが当村大工職の始めとなつた」という記述がある。このことから、問屋村で最初の大工職人の出現は大工移住によったのかもしれない。寺社や民家の建築のほかに明治期以降は洋風建築も手がけた。大工内の有力家系としては篠原家や石塚家、田中家が確認される。

八　出雲崎大工

新潟県の出雲崎大工は、同県出雲崎町を拠点にしていた大工で（図1-25参照）、大工名は町名を採用している。出雲崎町は日本海を北上する北前船の寄港地として栄え、また北国街道の宿場町としての機能も果たし、多くの物資と人々の往来する町であった（図1-9）。活動時期は一七世紀から二〇世紀。建築普請活動は新潟県、群馬県、福島県、北海道で確認され、太子講が認められる。大工集住の背景・要因には中継地集落であったことや佐渡金山等が関係していたと考えられる。寺社建築が多いが、民家建築にも携わっている。大工内の有力家系として小黒家が認められる。

図1-9　新潟県三島郡出雲崎町の集落

九　大徠大工

富山県の大徠大工は、同県氷見市上戸津宮大徠を拠点にした加賀藩の御用大工（狩第地大工）に属する大工で（図1-26参照）、大工名は旧村名（大曽村）を採用している。大徠村は石川県能登町の石動山東南斜面にあり、標高二〇～一五〇メートル余りの傾斜のきつい山間部である（図1-10）。活動時期は一六世紀末から二〇世紀。建築普請活動は富山県、岐阜県、石川県で確認され、大工内の組織は神明講が認められる。大工集住の背景・要因には石動山再興に従事した大工の居住等が関係していると考えられる。寺社のほか民家の建築にも携わっていた。五箇山や白川郷の合掌造民家に大徠大工が関わっていたことも知られている。大工内の有力家系は特に見られない。同じ加賀藩の御用大工（井波地大工）として井波大工が知られているが、井波は瑞泉寺の門前町であり、瑞泉寺の普請にも深く関わった井波大工は門前大工の性格が強いので在方集住大工からは除いた。

図1-10　大徠（村）のあった富山県氷見市戸津宮の集落

一〇　木曽大工

長野県の木曽大工は、木曽谷（木曽郡、塩尻市贄川地区、松本市奈川地区、岐阜県中津川市神坂・馬籠・山口地区）を拠点にしていた大工で（図1-27参照）、大工名はこの渓谷名を採用している。なかでも宮越村（図1-11）・原野村（木曽町新開）、荻曽村（木祖村）に大工や木挽が多く、それぞれ宮越大工・原野大工・荻曽大工などと呼ばれていた。活動時期は一四世紀から二〇世紀。建築普請活動は長野県や岐阜県などで確認される。大工内の組織としては「一手合」と呼ばれる八人前後の集団を構成して出稼ぎをしていたことが認められる。大工集住の背景・要因は良質な木材の産地、木挽・柚の存在等が関係していると考えられる。寺社や民家の建築のほかに明治期以降は洋風建築も手がけていた。大工内の有力大工として大工頭田中家が確認される。

図1-11　長野県木曽郡木曽町宮越の集落

一一　日原大工

兵庫県の日原大工は、同県内陸部の美嚢郡吉川町（三木市吉川町大沢）を拠点にしていた大工で（図1-28参照）、大工名は戦国末期に吉川谷に移住してきたとされている日原家の家名を採用している。旧吉川町大沢集落に居住していた日原家は代々正四位や従四下など、位階を称した大工であり、宮大工として多くの寺社建築に携わったとされている。活動時期は一六世紀から一九世紀。建築普請活動は兵庫県や京都府などで確認される。大工集住の背景・要因は前述の通り戦国末期の大工移住と伝えられ、丹生山明要寺との関連等も考えられている。寺社と民家の建築を手がけていた。有力家系としては大工名称にもなっている日原家が存在する。

一二　三木大工

兵庫県の三木大工は、同県三木市を拠点にしていた大工で（図1-29参照）、大工名は旧町名（三木町）を採用している。三木大工拠点の三木町は戦国時代には別所氏の城下町であったが、戦火で焼かれ復興されたものの、間もなく三木城が廃城となり、城下町としての機能はなくなった（図1-12）。活動時期は一七世紀。建築普請活動は兵庫県や京都府で確認され、太子講も認められる。大工集住の背景・要因は町の復興のため大工等の職人が呼び戻されたこと等が関係していると考えられる。主に寺社建築を手がけた。有力家系は特に見られない。

図1-12　兵庫県三木市の三木城址からの市街地

一三　比延大工

兵庫県の比延大工は、同県内陸部の西脇市に属し、中世の荘園名を村名とした旧比延庄村を拠点にしていた大工で（図1-13と図1-30参照）、大工名は旧村名を採用している。近世の比延町（村）を含む多可郡は姫路藩領、幕府領、下総国佐倉藩領、相模国小田原藩領を経て、延享三年（一七四六）には一橋家領となり、複雑な支配経緯を示す。活動時期は一八世紀から一九世紀。

図1-13　兵庫県西脇市比延町岡之山から見た比延の集落

組見本（40%縮小）

お取扱いは

中央公論美術出版
http://www.chukobi.co.jp
〒104-0031　東京都中央区京橋 2-8-7
TEL03-3561-5993　FAX03-3561-5834